

〈仮想と現実が入りまじり〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

時々、私のSNSにも知らない外国人

人男性から友達申請のメールが入る。うっかり応えると甘い言葉で近づいて、結局は騙して金品を巻き上げる犯罪を、国際ロマンス詐欺」というのだとか。科学技術が発達して、便利になった反面、まったく油断ならない世の中になった。恋の悩みからほんの出来心でSNSの世界に足を踏み入れると、そこはあっと驚く二転三転のサスペンスフルな世界だった…。

パリの大学で文学を教えるクレール（ピノシユ）は、五十代の知的美人。長年連れ添った夫ジルと離婚し、二人の息子はジルの家とクレールの高層マンションを行ったり来たり。ある週末、彼女は自分の半分ほどの年下の建築家リュドと激しい情熱の一夜を過ごす。自分では本気の恋のつもりだったが、リュドはどこかつれなくて、電話をかけても同居人の写真家アレックス（シ

ビル）に適当にあしらわれてしまう。

Facebookでもリュドに承認拒否されたクレールは、「クララ、二四歳」の偽名で新しいアカウントを作り、リュドにつながるために、まずアレックスに近づく。チャットを交わすうちに、彼は「クララ」に夢中になり、彼女の写真を見たがるようになる。クレールがアレックスに送ったのは、美しく大胆な二四歳の別人の写真だった。その写真を介して、ふたりはますます親密になり、さらには直接電話で話すようになる。若くて素敵な声だといわれて、クレールは有頂天。アレックスとのテレフォンセックスに燃え、幸福感の絶頂を味わう。

ところで、写真の主クララとは誰か。クレールはかかりつけの精神分析医ポーマン医師（ガルシア）に問い詰められて、ようやく姪カティアの名前を告白する。不慮の事故で亡くなった兄夫

婦の娘で、事故後に引き取り、実の娘のように育てたが、夫ジルは糟糠の妻クレールを捨てて二七歳年下のカティアを連れて家を出たのだった。

ネットの上では写真と魅力的な声で相手の心をわし掴みにできる欲びを知ったクレールだが、現実では男に捨てられる恐怖から逃れられない。初めてアレックスを迎えに行った駅で、列車から降りた彼は目の前のクレールはまったく眼中にない。必死で「二四歳のクララ」を探し回る。せっかく若作りをしてきたのにまるで透明人間のように無視されるクレールの焦り、悲しさ。クララが見つからず身も世もなく落胆するアレックスの姿に、もはやこれまで、と別れを決意するが…。

仮想の夢と現実のはざままで、クレールはアレックスと自分との関係について小説を書き、ポーマン医師に見せる。小説の中のクレールの姿のあまりの痛々しさに、ポーマン医師は驚く。なぜそれほどまでに自らを傷つけるのか。他人に愛されない恐怖、見放され拒絶される不安、捨てられる悲しさ…。人と人をつなげるはずの文明の利器にして、真逆な威力を発揮するネット社会の危うさ。現代のラブストーリーは氣息奄々だ。

『私の知らないわたしの素顔』

フランス映画 (101分)

監督：サフィ・ネブー

出演：ジュリエット・ピノシユ、ニコール・ガルシア
フランソワ・シビル、マリー＝アンジュ・カスタほか

公開中

©2018 DIAPHANA FILMS-FRANCE 3 CINÉMA-SCOPE PICTURES

